“荒れ”ている子どもの多くは何らかのかたちで被差別の状況におかれているがゆえに，将来に対する展望や，やる気を奪われているのです。彼らに対して，“荒れ”の原因にせまり自分の立たされている立場を正面から見つめさせて，厳しく生き方を問うとりくみが必要です。中退しても何とかやっていけるとか，喫茶店など楽をしてお金をもらえると言う子どもの甘さに厳しくせまり合える進路学活が今，問われているのです。

＜支え合う仲間づくりを＞

５月に私立高校を中退しようとしたＥさんは，そのことを聞きつけてきた数人の友だちに厳しくせまられて，再びがんばりだしました。その中には，部落差別を受けるなかで進学を断念した子どももいました。「私がこんな思いでこんなにがんばっているのにあんたは何やの。あの時の決意はどうしたん。」という言葉を聞くなかで，Ｅさんは再びがんばりだしたのです。

一人ひとりが自分の生活をさらけ出して生き方を考える進路学活が，卒業後もささえ合うなかまをつくりだしたのです。

卒業後あまりにも厳しい差別状況のなかで，たじろいでいる子どもたちに対して，彼らにだけ強くなれと言うだけではすまされない現実を前にするとき，差別を許さずささえ合えるなかまづくりが，進路保障の最も大きな課題といえます。

「大同教通信」より